

P.55 メソポタミア諸国家 【「目には目を，齒には齒を」】

解答考 訳文が「目には目を」を示しており，同害復讐の原則が読み取れる。また法典碑頭部に両者が並んでポーズをとっているが，玉座に腰かける太陽神シャマシュが，ハンムラビを「王」に任命し，同時に神の掟である法をこの王のみが実行できるよう授けていることが読み取れる。

解説 この法典は，1901年スサにおいてモルガンを長とするフランスの探検隊によって発見され，世界最古の法典ではないが古代オリエント史解明の重要な史料として大きな歴史的価値を有している。シャマシュは正義をつかさどる太陽神で，王権の象徴である杖と腕輪をハンムラビに与えようとし，ハンムラビもこれに対し右手をあげ恭順の意を示しながら，受諾していることがわかる。「メソポタミアは法の歴史」といわれ，王が神であるエジプトには法は存在しないが，シュメール人の都市国家時代からメソポタミアでは，神の命を受けた者のみ，法の支配を実現できるという伝統がある。この法典はシュメール以来の法を集大成し全282条からなり，アッカド語の楔形文字で記され，刑法や婚姻法，相続法，商法，家族法など内容は多岐にわたっている。また同害復讐で有名な刑法は，その適用に明確な身分差があることもよく知られている。

P.56 エジプト統一王国と東地中海世界 【王(ファラオ)は神の化身】

解答考 ピラミッドのような建造物をつくりあげるには，基礎となる単位や知識・技術が必要であったが，単位については，人の腕の長さを基本としたキュービットを用いた。資材の調達，労働者の動員，作業の組織化，単位の設定を行うことができたのは，王の権威があったからであった。

解説 「大きな家(ペル・アア)」を意味するファラオは，太陽神ラーの子として地上を支配した。ファラオが死ぬとオシリス神となって復活し，冥界に君臨すると信じられた。図⑥「死者の書」では，オシリス神が作物などにつながる緑色で描かれている。また，ピラミッド建設は，農閑期の人々へ仕事を提供するという公共事業的な色彩を帯びていたとされる。この建設に，腕を曲げたときに肘の先端から中指の先端までの長さを使ったキュービットという単位が使われた(図④)。この単位は，メソポタミア・エジプト・ギリシア・ローマで広く使われたが，各地域・時代によりその単位の長さは異なる。エジプトでは数種類のキュービットが使われ，同じ時代に524mmと463mmの2つのキュービットの長さがあった。ニュートンは，長い方のキュービットは王の肘からとられておもにピラミッドの内まわりに使われ，短い方は一般の人の肘からとられておもに外まわりに使われたと考えた。しかし，両者の関係は，短い方を ℓ ，長い方を L とするならば，

$$\frac{\ell}{L} = \frac{463}{524} \doteq 0.884 \doteq \frac{\sqrt{\pi}}{2}, \text{ したがって } \ell^2 = \left(\frac{\sqrt{\pi}}{2}\right)^2 L^2 = \pi \left(\frac{L}{2}\right)^2$$

となる。これは短い ℓ を一边にとった正方形の面積と同じ面積の円の直径が L であることを示す。また，土地用もさしとして，1キュービット=741mmも使われていた。これは，524mmを2辺とする直角二等辺三角形の底辺の長さとはほぼ等しい。このような数字関係からエジプトの技術水準の高さを生徒に理解させることもできる。

P.58 ヘブライ人とユダヤ人 【「私のほかに，何者をも神としてはならない」】

解答考 ヘブライ人の戒律の最も基本となるのは神がモーセを通してヘブライ人に授けた「十戒」であり，神との関係からみた特色は彼らの神を唯一と定めたことと，信仰のための偶像を一切否定していることなどである。

解説 オリエントの社会ではあらゆる自然物や自然現象を神格化する自然崇拝の多神教が発達する。その中で，唯一最高神ヤハウェの一神教を守り通し，ユダヤ教を確立したのがヘブライ人である。エジプトで一時間アテン神信仰があったものの，ヘブライ人の一神教がイエスの登場で世界宗教(キリスト教)に発展したり，さらにイスラームにも影響を与えたりしたことを考慮すれば，ユダヤ教の存在意義は計り知れない。ヘブライ人は数々の民族的受難を経験したといわれる。図①②にある「出エジプト」やモーセについて，理解を助ける補助教材として，アメリカ映画「十戒」(1956年)の鑑賞を生徒にすすめたい。なお「十戒」の内容について，①～④は神への宗教的義務，⑤～⑩は人間としての道徳的義務を示している。

発問例 1 ユダヤ教成立に至るまでの代表的なヘブライ人の民族的受難を調べてみよう。

解答調 & 解説 「出エジプト」や新バビロニアによる「バビロン捕囚」がある。最大の受難「バビロン捕囚」は祖国喪失という悲劇を招き，奴隸的使役に苦しんだが，ヘブライ人はこれらの受難を唯一神ヤハウェが課した試練と考え，メシア(救世主)をひたすら待望した。

P.60 オリエント世界の統一 【王の中の王】

解答見 図②はバクトリアの使節。下の①の地図でバクトリアの位置を確認すると，現在のアフガニスタン北部に相当する。ペルセポリスまで直線距離にして1500km程度であることから，アケメネス朝の広大な領土を実感できる。

解説 オリエント世界の統一は，先にアッシリアにより実現されたが，その規模や期間そして支配体制においてアケメネス朝ペルシアとは比較にならない。帝国の支配下に入った民族も多岐にわたり，ペルシア王への朝貢使節は23の民族に及んだという。まさにペルシア王は「王の中の王」といえる。アケメネス朝は，このような被征服異民族の統治にあたり，アッシリアのような強圧政策をとらず，彼らの法・言語・慣習そして宗教を尊重する寛容主義でのぞんだ。このことは，帝国支配を円滑に運営できた大きな要因となった。なおさまざまな民族衣装を身にまとい，めずらしい動物や特産品を献上する，この浮き彫りに描かれた使節は，当時の風俗を知る重要な資料でもある。

P.61 パルティア王国とササン朝ペルシア 【奈良に残るイラン文化】

解答見 弓の形態、馬の足、帝王の顔、帝王のパルティアン=ショットなどが類似点としてあげられる。

解説 ササン朝ペルシアでは国際色豊かな高度な文明が発達したが、その代表が美術工芸分野である。図①②を比較検討させれば日本との関係の導くことができる。はるか昔のペルシアの国など日本とは無縁と生徒は思いがちだが、その文化がはるばる「オアシスの道」の東の終点である日本にまで伝播していることを理解させたい。このほかにも正倉院宝物には白瑠璃碗、漆胡瓶、八曲長環などペルシア風の器物がいくつかみられる。パルティアやササン朝は、東ばかりでなく西のビザンツ帝国やヨーロッパ中央部までその高い芸術が影響を与えたことを忘れてはならない。

なお、「パルティアン=ショット」の図像の中で、帝王が狩猟することは、戦闘の訓練やスポーツなどの実用的な側面のみならず、帝王自らが作物や家畜に害をなす動物を殺すことで、作物や家畜の増加を保証するという儀礼的な面も合わせていたとされている。

P.63 古代地中海文明の生成 【母なる海から生まれた文明】

解答見 図②には、たこが描かれている。図①のイルカや魚が海中で自由に泳いでいる姿からも、クレタ文明がオリエントとは異なる海洋文明であることがわかる。壺絵や壁画の色彩はあざやかで自由な筆致で描かれており、明るくのびのびとして、写実的かつ躍動感のある表現になっている。クレタやギリシアの人々はエーゲ海や地中海のさまざまな海の恵みを楽しみ、また貿易や植民活動などを活発に行って独自の歴史的地中海世界を構築していく。

解説 小アジアとギリシア本土の間にはさまれた内海のエーゲ海は多島海ともよばれ、多くの島々が散在し、複雑な海岸線が多く、良港にも恵まれていた。ギリシア本土の土地はやせて雨が少なく、山がちの地形で平地は限られている。したがって穀物の自給が容易ではなく、不足しがちの穀物を特産物のオリーブ油やワインと交換する交易活動が早くから発達した。また植民活動や移住も、厳しい自然を生き抜く手段として広く行われてきた。海岸沿いに都市が形成され、諸都市を結ぶ海上交通路が発達し、広範囲な交易・植民活動は各地の相互文化の交流を生み出していった。それはやがて地中海を中心に「ギリシア・ローマ世界」という、一つのまとまった西洋古代文化(「古典古代時代」)を生み出すことになっていく。

P.64 ギリシア都市国家 【アテネ民主政の主役たち】

解答見 図①の重装歩兵は兜・すねあて・槍・盾の武具を身につけ、経済的に武具を自弁できる平民(有産市民)で構成される。図②③の船のこぎ手は、武具は不要で、平民で最も貧しい人々である無産市民が活躍していた。

解説 アテネ民主政の発展をとらえる場合に大切なことは、ポリスは原則として戦士共同体であり、戦士である者に参政権があるということである。貴族に対してなぜ平民が参政権を要求できたのかを図①から、そしてペルシア戦争を経て、なぜアテネ民主政が徹底化しペリクレス時代にその完成を迎えたのかを、図②③より生徒に考えさせたい。「戦争が民主政を育てた」としばしば言われるが、戦術上の変化と活躍した階層をここから読み解かせたい。

発問例 1 重装歩兵や三段櫓船を使用した戦術とはどのようなものだったか、調べてみよう。

解答調 & 解説 重装歩兵戦法ともいわれ、円盾は左胸を覆えるが右胸は敵にさらされたので、右隣りの戦士の盾で覆ってもらわなければならない。密集隊形が形成された。この密集隊は堅固で幅広く展開する戦車隊のような破壊力をもち、隊員相互の平等性と連帯性が必要になってくる。三段櫓船は波の静かな地中海に適した軍船で、こぎ手の力漕によって敵船の横腹に衝角を激突させ、武装兵が敵船に乗り込み敵を倒す接近戦法だったので、こぎ手の優劣が勝敗を大きく左右した。ペルシア戦争のサラミス海戦ではテミストクレスが無産市民をこぎ手に組織し、この戦術が功を奏しギリシアを勝利に導いた。

発問例 2 p.65図⑩⑪のパルテノン神殿の建っている場所はどのようなところか。また神殿内部には何がまつてあるのだろう。

解答見 アクロポリスに建っており、守護神である女神アテナをまつてある。

解説 信仰心の厚いギリシア人はポリス建設の際、共通の神を守護神として神殿にまつ場合が多く、防衛上の理由からもアクロポリス(「高い城」の意味)に建てられた。したがってアクロポリスは神をまつる聖地であり、そこでは宗教的儀式がとり行われた。なおアテナ像は現在失われて残っていない。

P.66 ヘレニズム時代 【ギリシアとオリエントの覇者、激突す】

解答考 アレクサンドロス。

解説 図①では、先陣をきって突撃するアレクサンドロスがダレイオス3世に迫り、戦車上のダレイオスは倒れた部下に悲痛な表情で手をさしのべている。また、戦車の御者が、早く脱出しようと馬に鞭を当てる姿も描かれている。生徒のアレクサンドロスへの関心が高いことから、彼のエピソードとともに、遠征の経緯・経路、彼の死後の分裂について地図(p.6~7, 本頁㊦)を利用して説明したい。アレクサンドロスの東征は、オリエントに君臨したアケメネス朝ペルシアを倒すとともに各地にギリシア風の文化を伝播させ、現地の文化と融合したヘレニズム文化を生み出した。ギリシア文化の東伝については、ギリシア彫刻とインドの仏教とが結合したガンダーラ美術(p.10, 80~81を参照)を紹介する。

発問例 1 ダレイオス3世を破った後で、アレクサンドロスはその娘と結婚し、部下のギリシア人将兵にもペルシア人女性との婚姻をすすめている。その理由を考えよう。

解答考 & 解説 東西文化の融合を進めようとしたため。イツソスの戦いに完敗したダレイオス3世は妃や王女を残したまま遁走した。大王はその王女の一人と結婚し、部下のギリシア人将兵とペルシア人女性との集団結婚式を実施したという。これは彼がいかに東西融合

に熱心に取り組んだかを示している。このほかにも、アレクサンドリア市の建設、ギリシア人の東方移住などを行っている。

P.68 ギリシア・ヘレニズムの文化 【身近なギリシア文化】

解答見 図④のコリント式。

発問例1 身近なところにあるギリシア文化を探してみよう。

解答調 (例)列柱式の建築、民主政治、演劇、オリンピック競技、言葉、神話、諸学問(哲学・歴史学・医学・文学など)。

解説 渦巻き文様を使っているのはイオニア式である。ヨーロッパ文化及びヨーロッパ人の精神の源がギリシアにあり、それは脈々と今日まで受け継がれている。ギリシアでは、国家の主催する演劇は大切な宗教的行事の一部であった。劇場は斜面を利用してつくられ、後部からでも音を十分聞き取ることができ、観客全員が鑑賞できるように配慮されている。その設計や構造、さらには演劇の精神は、現代の劇場建築や演劇にいづいている。また、ヨーロッパのみならず、現代日本人の身のまわりにも「ギリシア」があることに気づく。日本各地でギリシア風の柱がよく使われている。例えば、図①の昭和初期に完成した明治生命館は、コリント式の列柱が採用され、重要文化財に指定されている。さらに、ギリシア神話は西洋文学の源流になっており、美術においても文学同様に数え切れないほどの素材を提供している。われわれはこれを日常的に本や美術館で見ているのである。

P.70 共和政ローマ 【古代ローマを表す4つの頭文字S.P.Q.R】

解答見 図①の中に入っているのは◎。国政の中心になったのも◎で、元老院議員としてローマを統治した。

解説 トガはローマ市民の正装用の上着。複雑なひだの形式と色や装飾によって着用者の階級がわかる。緋色(赤紫)は権力を象徴し、その縁どりのあるトガを着用しているのは、高位官職経験者である。真っ白なトガは平民男子で成年に達した者が着用した。護民官などもこの白いトガを着ていた。前4世紀のリキニウス・セクスティウス法で平民出身の執政官が登場するようになると、緋色のトガを着用する者は良き父祖をもつ貴族だけでなく、平民にも及んだ。元老院は「権限」はもたないものの、政務官を指導して、内政・外交・財政・宗教・立法まで国政全般にわたり積極的な役割を果たした。議員は終身制で高位官職経験者が独占していたが、大土地所有の富裕平民は有力な貴族の家系と結託し政界に進出、共和政末期には元老院には貴族のみならず、在来の貴族と富裕な平民が融合した「新貴族(ノビレス)」が多数進出した。

発問例1 元老院はどのように運営されたのだろうか、調べてみよう。

解答調 & 解説 会議はまず議題が報告され、議員にその議題に対する意見が求められる。意見陳述の順番は官職経歴などで決められていた。発言が終わると採決が行われ、議員達は賛否のいずれかの方に歩いて採決し、元老院議決がつくられた。議員の中には全く発言しないで採決だけに参加する「足の議員」も多数いた。

P.72 帝政ローマ 【ローマで実権をにぎったのは誰だ?】

解答考 オクタウィアヌスはプリンケプスとして共和政の伝統を尊び、元老院との共同統治を形式的にとったが、実質的には強大な権力者として君臨したこと、その業績によりさまざまな形(図⑤⑥)をとりながら神格化がさかんに行われたことがある。

解説 「内乱の1世紀」末期からオクタウィアヌスによる権力掌握までの過程を、図①~④を使い整理しておきたい。オクタウィアヌスの治政を帝政の開始とみなすのは、彼の称号となった「アウグストゥス」、そして獲得した数々の権力(軍隊指揮権、政務官指名権、宣戦講和権、護民官職権など)からである。一般的に皇帝を死後神格化する風習が生まれるが、彼は在世中に属州民から「神」とみなされ、あらゆる神殿にまつられた。図⑥は、「プリンケプス」にして「インペラトル(凱旋將軍)」という特別な地位に就いていた彼が、軍装姿で指揮官の権威を表す棒を左手に持ち、右手をあげながら将兵に語りかけているポーズをとっている。神格化された皇帝は帝国の象徴となり、皇帝崇拜が帝国への忠誠と団結を表すことになったのである。

発問例1 クレオパトラと図②③④の男性との関係を時代の古い順に並べよう。

解答調 & 解説 ③→②→④。クレオパトラ7世(プトレマイオス朝には同名の女王が7人いた)は、弟プトレマイオス13世とエジプトを共同統治。一度は王位を追われたが、カエサルの方を添えを得て復位した。カエサルの死後、アントニウスと結婚し彼との間に3人の子どもをもうけたが、対立するオクタウィアヌスにアクティウムの海戦で敗れ、毒蛇に体を咬ませて自殺したという。

P.74 キリスト教の成立・発展 【十字架のイエス】

解答見 「ユダヤ人の王様」のよび名は、イエスをローマ帝国への反逆者とし、メシアを僭称してユダヤ民衆を扇動する者にとらえ、ユダヤの支配層からの憎悪を侮蔑的に示したものである。

解説 本ページはイエスの生涯と思想、その後のキリスト教の発展をローマ帝国との関係で学習するのが主眼となる。生徒にとってのイエスは図①の「十字架のイエス」の印象が圧倒的なので、なぜ十字架で処刑され、どのようにしてメシア(キリスト)と認められたのかを説明するとともにp.72~73と対照させながら、キリスト教徒の迫害にもかかわらず、帝国の衰退とは逆に信者を増加させ帝国内に徐々に浸透していくことに触れたい。図②はローマの支配下にあったパレスチナで、イエスの宣教活動の期間が生涯のわずか1年半ほどで、しかもその範囲も限られていたことに注目させ、世界宗教に発展した背景を調べさせたい。

発問例1 図②と下のキリスト教発展の地図を参照し、ローマ帝国内におけるキリスト教会の拡大のようすを調べてみよう。

解答調 & 解説 コンスタンティノープルから小アジアにキリスト教徒が多く、キリスト教は東方から西方へと広がっていった。異邦人へのキリスト教伝道はパウロにより開拓され、シリア・小アジア、ギリシアからローマへ、さらにアルメニア・エジプトとギリシア